

追悼

一昨年十一月九日、名古屋で私立短大協会の秋季総会があった時、勤務校の用命でそれに出席した。翌日は、犬山の明治村などの見学が予定されていたが、容態が思わしくないという知らせを受けていた鈴木さんの事が気になり、見学の方は断わって、早朝名古屋を出るひかり号で上京した。途中、新雪を頂く富士がくっきりと青空に聳え、中腹から愛鷹山にかけては、白雲が棚引いていた。豊橋出身の鈴木さんも、東京との往復の折、これと同じ風景に出くわしたことがあるかも知れない、とふと思った。

東京駅に荷物を預け、その足ですぐ国領の慈恵医大付属第三分院へ向かった。病床に仰向けに臥した鈴木さんを見た瞬間、その衰えは覆いようもないもののように見えた。それでも、笑顔で迎えてくれ、跡切れがちながら、しばらく言葉を交すことが出来た。どうかすると、急に声が細くなり、はっとしてその口許を見つめることもあった。私は別れ際に、瘠せ細ったその手をそつと握ったが、握り返す力がほとんど感じられなかった。寂しかった。そして生ある内の対面は、

これが最後となった。

鈴木さんが昭和四十四年の暮に出した『小倉百人一首』は、決して浩瀚の書ということは出来ないが、その全身全霊を打込んでの述作と思われる、鈴木さんの学問の集約として完璧な結晶を遂げており、それは鈴木知太郎という一個のかけがえのない人間の記念像のように、私には思われる。若くして山田孝雄博士の薫陶を受け、ついで池田亀鑑博士の源氏物語校本作製の歴史的事業に参与し、おのずから新興の文献学的研究の本道を拓き進むことになった。このことは、その資質と相俟って、文学の実証的研究の領域において、鈴木さんが精確無比のみずからの学風を樹立する結果を導いた。鈴木さんの手に成る古典の校訂本は、最も信頼のおけるテキストとして、安心して使用することが出来ることを、今改めて思いみている。私の経験では、これは稀有の事に属する。しかし鈴木さんはこの精確無比の対象処理能力のほかに、卓越した文学鑑賞眼を、同時に身に具えていたと思う。それが、文献学的研究においては、かけがえのない背後の支えとなり、その稀有の正確性は、単なる科学的処理によって獲得されたものとは異なる、文学研究の大道をゆくものとしての性格であることを自証しているように思う。『小倉百人一首』は、各項にわたり精確な実証的記述に終始していることはいうまでもないが、それまであらわな姿を見せることを悼んでいた観のある、独自の柔軟鋭敏な鑑賞の営みが、ここでは表面にその姿を現わし、作品の表象に沿って進められる行きとどいた「鑑賞」には、深い学殖と博い教養がすべて投入され、鈴

木さんの懐かしい体温を直に感じさせるものがある。私の想像では、鈴木さんは、この一冊に、無限の愛情を留めたのではないかと思う。

十二月七日午後、三鷹の禅林寺で葬儀が営まれたあと、遺体が靈柩車に移され、喪主の毅君が会葬者に謝辞を述べている時、ふと見上げると、冬枯れの櫛の梢を透かして、ほんのりと乳白色に霞んだ空が見えた。その時、最後の対面で、右眼を軽く閉じ、左眼を半ば開いたまま、やさしい微笑を浮べた死顔に合掌したばかりの私は、何とはなしに、鈴木さんの大往生を信ずる思いが、胸の底から湧いてくるのをおぼえた。四十数年来の心友を喪った悲しみの中で、これをせめてもの心やりとせねばなるまい。

(五四・一二)